関連学会報告　臨床検査学教育 Vol.12, No.1 p.87 ～ 89, 2020.

日本ワンヘルスサイエンス学会の取り組み

後　藤　一　雄*§　鈴　木　幸　一*

はじめに

臨床検査技師はその専門知識を生かして、従来の病院検査室のみならず、不妊治療現場における胚培養士、遺伝子検査業務担当者、または医薬情報担当者としてその活躍の場を徐々に広げている。これらの業務と比較するとまだまだ少数派に属するかもしれないが、動物の病気の検査・診断の場で活躍している臨床検査技師も少なからず存在する。検査対象の動物とはペット、家畜、野生動物、展示動物や実験動物である。

人間の健康を考えるとき、人間社会だけでなく、家畜や自然界の動植物、あるいは環境全体を総合的に考慮する必要があるということから「One Health：ワンヘルス」という言葉が使われるようになってきた。すなわち、「ワンヘルス」の概念では、ヒトの健康を保つためには健全な動物や環境の健康が必要であり、逆に動物や環境の健康もまたヒトの健康と密接にかかわっているということになる。こうした考え方は以前から言われてきたことだが、「ワンヘルス」という言葉自体は、2004 年 9 月に行われた野生生物保護協会とロックフェラー大学が主催したシンポジウムの中ではじめて登場した。また最近では「One Welfare」という言葉もよく耳にするようになった。

ヒトと動物の関わりについてたとえば、Katayama らは飼い主のストレスがペットのイヌにも伝わり、ペットのイヌがヒトに共感する能力があることを示している[1]。また、動物とヒトとの間で感染を起こす人獣共通感染症や、家畜の飼料に含まれる抗生物質と薬剤耐性菌との関連も問題となっている[2]。One Welfare ではたとえば家畜が健康的に維持されているかどうかは、飼育者が幸せに生活できているかにかかっているといわれる。これは飼育者が社会的、経済的に不幸な状態にあると、飼育者のもつ家畜の維持管理に手が行き届かず、動物が健康な状態に保てないことを意味している。

I. 日本ワンヘルスサイエンス学会について

こうした背景のもと 2017 年に日本ワンヘルスサイエンス学会が設立された。本学会の目的は人間・動物・環境の３者の健康のバランスが非常に重要なものであるとするワンヘルスの立場から、医学・薬学・保健衛生学・獣医学・農学・理学・工学などの領域の研究者が集まり、新興感染症、人獣共通感染症、環境汚染などについての研究成果を報告し討論することによって、ヒト、動物、環境の健康に貢献することにある。本学会の理事長は岡山理科大学教授の藤谷 登先生で生物医科学検査研究センター長を務める。本学会には臨床検査センターで動物の検査をしている臨床検査技師や、臨床検査技師の養成大学で微生物を教えている教員など、臨床検査関連の方々が多数参画しており、2019 年 9 月時点での学会員の総数は 50 名を超えた。学会のロゴを**図 1** に示す。

* 帝京大学医療技術学部臨床検査学科　§gotok@med.teikyo-u.ac.jp

図１　日本ワンヘルスサイエンス学会のロゴ

II. 第３回学術集会

本学会におけるこれまでの学術集会の開催は2019年で３回目を数える。第３回学術集会は、帝京大学医療技術学部臨床検査学科、鈴木幸一を大会長として、2019年９月14日（土）に東京大学弥生講堂・一条ホールで行われた。本集会では、「人を取り巻く環境と感染症から考えるワンヘルス」をテーマとして、環境中に生息し、人やその他の生物に感染症を引き起こす病原体にフォーカスをあて、グローバルな視点からのワンヘルスサイエンスを考える機会となった。（**図２**）

特別講演として「ナショナルサーベイランスからみた薬剤耐性菌の現状とこれから」（国立感染症研究所薬剤耐性研究センター、センター長、菅井基行先生）、教育講演として「ヒト化マウスについて」（実験等物中央研究所動物資源技術センター、センター長、高橋利一先生）からお話しをいただいた。また、会長講演は、「ハンセン病を自然発症したチンパンジー、ハルナが教えてくれたもの」と題して行われた。その他、ペット・野生のマウス・ラットで流行している人獣共通感染症、水圏環境中に潜む非結核性抗酸菌の日本における調査報告、稲に感染するウイルスの紹介などがあった。本学術集会での演題は先に述べた通り対象分野が幅広く、専門性を深化させると同時に幅広い知識が得られる場としてとても親しみやすいものとなっている。

図２　第３回日本ワンヘルスサイエンス学会年次学術集会のポスター

III. 学会の現在の活動

現在学会ではこうした学術集会の開催のほか、「獣医関連専門家；Veterinary Paraprofessional（VPP）」および「ワンヘルスサイエンティスト；One Health scientist（OHS）」の学会認定資格設立を目指して活動を行っている。VPPは獣医学の基礎知識をもち、行政、民間企業において動物とヒトの健康ならびに環境の健康に貢献できる公務員、研究者、および関連職従事者を認定するものであり、OHSはOne World, One Health and One Medicineの概念を理解して、ヒト・動物・環境を一体とする健康のバランスについて、高度の見識を有し、その実践をミッションとする人材を認定するものである。国際獣疫事務局（World Organization for Animal Health; OIE）からはVPPの具体的な戦略が示されている[3]。また、日本学術会議からは「人口縮小社会における野生動物管

理のありかた」が政府に提言され[4] こうした資格の必要性が高まっている。現在学会では資格認定のためのディプローマポリシー、コアカリキュラム、大学在学時に取得できる”Junior VPP”、認定校制度、認定単位などを策定中であり、第３回学術集会においてもそれらに関する概念の紹介と進捗状況の報告が行われた。

IV. 臨床検査技師および臨床検査技師を目指すみなさんへ

本学会は、「ヒトと動物が幸せに暮らせる社会」を目指すにはどうすべきかを考える場として設立された。臨床検査技師の知識・経験は、ヒトの医療のみならず動物医療や環境問題を考えるうえで欠かせないものとなっている今、一人でも多くの方々が本学会に参加されて論議いただけることを望みます。なお、今年の学術集会は９月 12 日（土）9：00 から東京大学弥生講堂で行われる予定です。

詳細は本学会ホームページ
http://jsohsci.kenkyuukai.jp/about/
を御覧ください。

文　献

1) Katayama M, Kubo T, Yamakawa T, Fujiwara K, Nomoto K, Ikeda K. et al. Emotional contagion from fumans to dogs is facilitated by duration of ownership. Front Psychol 2019; 110: 1678-88.
2) 田村豊 . わが国の食用動物由来耐性菌対策と耐性菌の現状 . モダンメディア 2015; 61: 161-8
3) OIE competency guidelines for veterinary paraprofessionals. https://www.oie.int/fileadmin/Home/eng/Support_to_OIE_Members/pdf/A_Competence.pdf#search=%27OIE%2C+VPP%27
4) 日本学術会議　人口縮小社会における野生動物管理のあり方 http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/yaseidobutu/yaseidobutu.html